

ばんばがまのお話し～酒井明 説話集5※～

それはそれは寒い冬のことでした。年の瀬が押し迫ったので、お嫁さんは嫁入り先の勝間川から、親元の一生原へ届け物をと山越しで戻って来ました。

途中は、おもの川の山々がうっそうと茂っているのですが、慣れた道だからこわいと思うこともなく、喜ぶ親の顔を見ることができました。

「せめて一晩だけで泊って帰れ」

とすすめられ、ゆっくりしているうちにしんしんと、夜冷えが強まりいつの間にか外はまっ白い雪に覆われてしまいました。

朝になって

「この雪では山越しはとても無理だ」

と止められ、昼下がりにどうにか天気も落ち着いてきたので、どうしても帰ると里の家をあとにしました。嫁入り先の勝間川でも

「まさかこの雪では帰りもすまい」

と言いながらも気丈な嫁のこと、ひょっと帰っておって途中で危険な事でもあってはと、心配して迎えに出かけてきたが、途中で出会うこともなくとうとう一生原までやって来ました。

これはおかしいと、今度は一生原、勝間川みんなで奥に向って捜しに出かけました。気をつけてみると奥に向いた足跡が一人分だけついている。

深い雪だから当たり前のことだが、嫁入り先の人達はそれに気付かず来てしまったのです。その足跡はとある一つの炭焼き窯までやって来てぱつりとなくなっていました。

大声あげて呼んでも返事一つない。

ふと見上げると、窯の横手のユスの木の枝に嫁の、そうたがかかっています。そのそうたが何を言おうとしているのか、皆目誰にも見当のつかんことでした。

その年の暮れ冬の日姿を消した嫁はそれ以来、ようとして行方が知れません。

土地の人々はそのことを伝えて、今もその窯跡を「ばんばがま」と呼び、どこに行ったのか、天狗の仕業か、神かくしかと言っています。

「なんとも解せないことも起こるものよのうし」

と90才の年寄りが話してくれました。

一生原、おもりの川は山奈有岡から北に入った所で、八色鳥の鳴く山里です。



※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時) 長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。